

応急仮設住宅からみた被災者の動向

熊本市南区藤山仮設団地での活動を通して

熊本大学 熊本創生推進機構
准教授 安部美和



1. はじめに

2016年4月14日と16日に発生した熊本地震では、熊本県、大分県、福岡県、佐賀県、宮崎県で死者273名（災害関連死含む）、重傷1,203名、軽傷1,606名の被害を出し、熊本県と大分県の2県で8,667棟の住宅が全壊となった。熊本県における最大避難者数は、183,882名（避難所855カ所開設）にのぼった¹⁾。この地震に伴い、熊本県内には16市町村で110団地4,303戸の仮設住宅が用意された。そのうち、2019年9月30日の時点で1,504戸3,486人がまだ仮設住宅に居住しており、県内外の借上型仮設住宅（2,952戸6,672人）と公営住宅等利用者（65世帯160人）と合わせると、4,521戸10,318人が仮設住まいを継続していた²⁾。

表1 熊本市における応急仮設住宅

団地名	所在地	整備戸数
塚原仮設住宅	南区城南町	96
さんさん2丁目仮設住宅	南区城南町	16
秋津中央公園仮設住宅	東区東野	54
平原仮設住宅	南区富合町	27
藤山仮設住宅	南区城南町	150
南田尻仮設住宅	南区富合町	28
舞原仮設住宅	南区城南町	87
東町仮設住宅	東区東町	38
藤山第2仮設住宅	南区城南町	45

熊本市には、表1の9団地541戸が準備され、整備完了に応じて順次入居が行われた。本稿が対象とする藤山仮設住宅、藤山第2仮設住宅は、併せて195戸の団地であり熊本市内最大、県内では益城町のテクノ仮設団地（516戸）、木山仮設団地（220戸）に次ぐ規模の仮設団地となっている³⁾。

本稿では、2017年9月から始めた大学生の仮設住

宅でのボランティア活動を通して、被災者との関りや仮設団地の雰囲気などのように変わっていたのか、仮設入居者の動向とともに記録する。

2. 藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅

(1) 立地と入居者

藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅は、熊本県が所有する城南工業団地（熊本市南区城南町藤山）の敷地に建設された。藤山仮設団地は2016年8月5日から入居を開始し、遅れて同年10月4日から藤山第2仮設団地の入居が開始された。特に藤山第2団地は、他地域の仮設住宅を希望したものの抽選に漏れた世帯など、城南町が地元ではない方の入居が多かった。また、藤山第2団地は住宅の表示の際、番号の前に「B」という文字が入る。そのため、住民の間では藤山第2仮設を「B棟」と呼ぶ、それに応じてか住宅表示にアルファベットが使われていないにも関わらず、藤山仮設団地の方を「A」や「Aの人」と呼んでいた。入居時期がずれたことや、地元住民ではない方が多く藤山第2仮設に入居されたこともあり、当初は同じ敷地にいながら交流はなく、仮設団地入居から1年経った頃でも、お互いから「Aだから」「Bだから」という言葉が聞かれていた。

プレハブの仮設住宅は、玄関がみな同じ方向を向いているため、玄関を開けると舗装された通路と向かいの縁側や物干し場が見え、縁側の先は砂利の庭になっている（写真1）。また、住宅の側面には小さな倉庫が各戸設置されており（写真2）、逆側の側面には木製のベンチが置かれている。スロープの必要な世帯には、玄関に木製のスロープが設置されており、敷地内には集会所が3カ所、平日の昼間に相談支援員のいる

事務所が1カ所、グラウンドゴルフを楽しんだりできる大きなグラウンドと敷地の隅にペット用のネットで囲

われた小さなグラウンドがある (図1)。



写真1 住宅の間



写真2 プレハブの住宅と側面の倉庫

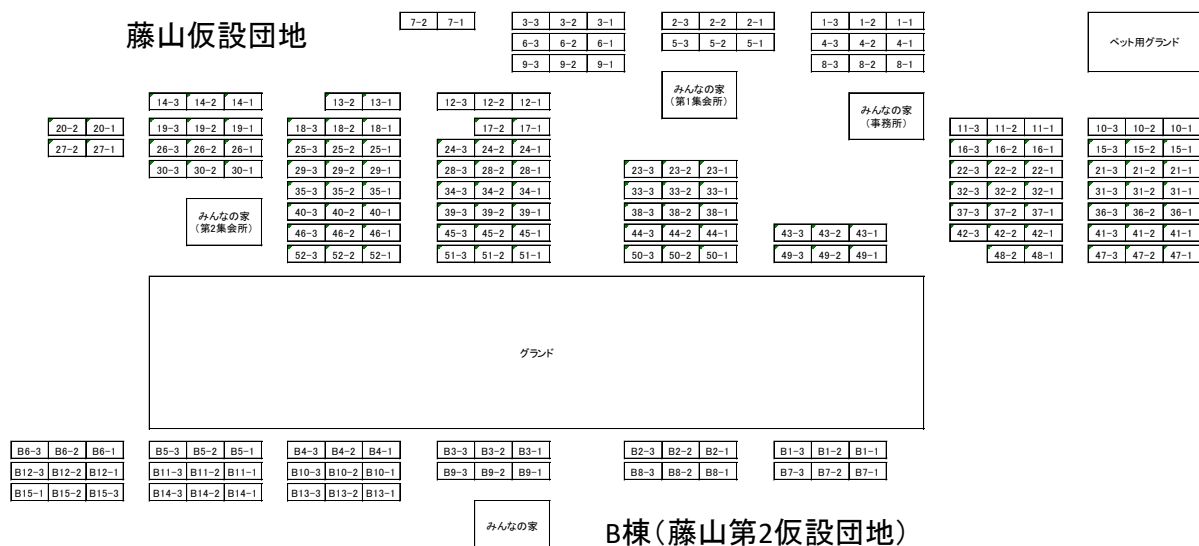


図1 藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅の配置

(2) 入居者

2016年度の家族調査票が残っている方のみの数字であるが、当初の入居者は独居が30世帯、2人家族が80世帯、3人家族が51世帯、4人以上の家族が39世帯であった。特に、2人家族の大半は、高齢夫婦であった。男女ともに65歳以上の入居者が多かったことが分かる(図2)。また、複数の世帯がペットを連れた入居であった。

入居先の選定にあつては、被災者が希望を提出し、仕事先や学校の場所、元の居住地等ができる限り考慮されたものの、抽選に漏れ遠方から藤山仮設に来られ

た方もいる。現存している世帯票の記録では、熊本市南区城南町から144世帯、熊本市南区富合町から1世帯のみが住所で確認できるが、熊本大学が支援に入り始めた2017年9月頃の居住者には、南区以外の方も含まれていた。当初は空き部屋が出ると次の入居者が入るような具合だったため、195戸のプレハブがあるが、入居した世帯数はそれを超える。自治会長の記憶によると、南区城南町から188世帯、南区富合町から5世帯、南区田迎から3世帯、北区八景谷から2世帯、西区島崎、西区池ノ上からそれぞれ1世帯が入居していたとのことであった。

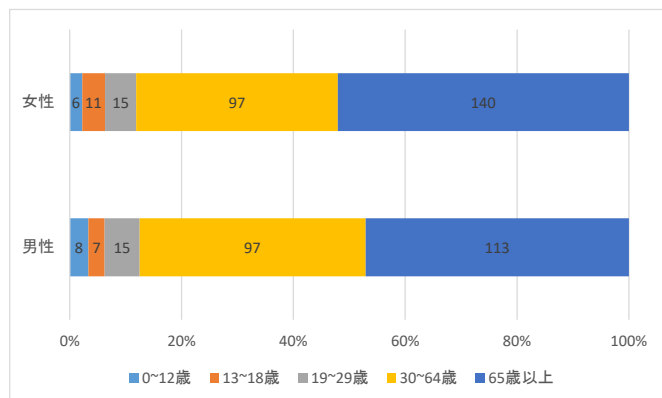


図2 入居時の男女別年齢構成

仮設住宅への入居にあっては、どの家になるかはくじ引きで決まったが、抽選会場では住民は前に呼ばれて見守るのみで、実際にくじを引いたのは行政職員だった。そのため、「自分が家を引き当てたという感覚はない」という声が聞かれた。また、仮設住宅への入居にあたり、熊本市が世帯調査を実施し家族関係など全ての把握に努めた。そのため、家庭によっては家の経済状況、家族間での人間関係など外に見せたくなかった情報が浮き彫りになったという不満も聞かれた。

(3) 仮設団地での自治組織

熊本市の意向で、仮設入居者の話し合いにより自治会が結成され、仮設団地内を15の班に分け配布物や回覧を回す単位とした。自治会長は、2019年に自宅を同じ場所に再建し仮設住宅を退去されたが、現在も役職を継続し仮設団地に通っている。もともと仮設団地が建設された南区城南町藤山地区の居住者で、地元でも自治会長を務めていた経験があること、藤山仮設の入居者の多くが城南町の方だったこともあり、他の住民の意向で役員となった。

自治会は年1回総会が開催され、毎月班長会が開催されていたが、仮設住宅からの退去者が増えてくると、班の維持は難しくなり、2019年6月には半数に、11月には1班になっている。配布物も、現在は班長会を通さずその都度日中常駐している相談支援員が配布している。

3. 仮設団地での支援

(1) 支援活動の変化

藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅を対象とした支援活動は、2017年度にピークを迎えた。仮設団地に届いた支援物資数については記録が残っていないため、サロン活動や演奏会、鍼灸などの活動数(延べ数)の変化をしてみる。地震の発生した2016年度は10件、2017年度162件、2018年度95件の支援活動が実施され、2019年は12月末時点で68件であった。

内容としては、餅つきなど季節の行事に合わせたもの、鍼灸マッサージや足浴、健康相談など身体に関わるもの、落語や太鼓、マジックショーにフラダンスなど様々なものが行われたが、1年以上の長期にわたり継続開催されていたのは、お手玉などを作成する手芸、鍼灸マッサージ、お坊さんたちによる傾聴、昼食付の料理教室であった。長期開催されていた活動の特徴としては、仮設入居者が率先してリーダーを務めたもの、作品を持ち帰れたり、食事が提供されたりというものであった。こうした活動も、災害公営住宅への入居が進むにつれ参加者が減り、2019年12月末にはほぼすべての活動が終了している。

熊本大学の学生活動も、2019年度を境に内容を変更した。仮設入居から1年が経過したころ、大学周辺での活動もひと段落し、支援者が減り始めている仮設住宅での活動を始めることとなった。2017年9月にはじめて藤山仮設・藤山第2仮設を訪問した際には、「市内にこんな大きな仮設団地があるのか」ということと「これから何ができるんだろう」という学生たちの言葉が印象的であった。「若い子たちが来てくれるだけで元気が出る」と言ってもらえたことから、とにかく毎月通うことになったが、当初は漬物づくりを教わるなど、何か支援をするというよりは楽しくお茶を飲むだけだったように思う(写真3)。その後、ひな祭りやクリスマスの飾りつけなど、毎月の行事に合わせた活動を考えてきた。



写真3 2017年10月の大根の漬物づくり

しかし、2019年になるとこれまで見られていた支援活動が目に見えて少なくなり、入居者の退去も進んだため、かかわり方を見直そうという話になった。自治会長や相談支援員の方々と話し合い、毎月の活動時間に空き家周辺の草抜きをすることにした(写真4)。

2019年4月には、195戸あった仮設住宅のうち入居があったのは73戸のみで100戸以上が空室となっていた。規模の大きな仮設団地であった分、入居者が減ると敷地の管理が難しい。仮設住宅に残っている方々が自宅周辺の草抜きを繰り返しても、あちこちに草に覆われた部屋が見られた。ペットと入居している世帯が多いため、除草剤などの薬剤を撒けず、手作業による除草が必要だが人員が確保できなくなっていた。ペットと一緒に入居可能な災害公営住宅の完成は2019年11月であったため、残っている入居者の多くがペット同伴の世帯となっていた。

また、学生たちがみんなの家や相談支援員の事務所にお手伝い依頼ポストを設置した。換気扇など高い場所を掃除したい、箆箆の上の荷物を下ろしたい、重い家電を運びたいなど、必要に応じて依頼を投函してもらうためであった。毎回2~3軒の掃除の依頼があり、入居者と一緒に退去の準備などをした(写真5)。数少ない小学生や保護者からは、夏休みの自由研究のお手伝いといったリクエストも寄せられた。



写真4 夏場には背丈ほど草が伸びる



写真5 玄関で換気扇掃除

(2)「あんたらはBの人」

当初、藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅での活動は、入居者との関わり方に頭を抱えた。入居時期のずれと、仮設団地の規模の大きさが影響してか、藤山仮設住宅と藤山第2仮設住宅の入居者同士の交流が非常に少なく、しかもお互い「Aの人」「Bの人」といい、それぞれみんなの家を中心とした縄張りのようなものが存在していた。

熊本大学の学生がボランティアに入り始めたとき、初回の交流がB棟のみんなの家で行われた。そのため、それ以降の活動にあっては「あんたらはBの人」という声が聞かれ、地区に関係なく活動するということが難しい時期があった。「ここはAの集会所。Bのは向こう」という風に、入居者の中では自分の仮設の場所によって使える集会所が明確に分離していた。住宅再建が終了し仮設から引っ越された方との交流は、

「ボランティアとかの支援は仮設にいる人のためでしょう」「出られた方を呼ぶのはいかなものか」と、これまで交流があった方々にも仮設で実施するイベントの案内を出したいと相談すると、そんな返事が聞かれる時期があった。ボランティアの支援は、仮設住宅に「今」住んでいる人を対象にするべき。直接そうした声を掛けられることもあれば、場の雰囲気から何となく言い出せない空気を感じ取る場合もあった。

季節ごとのイベントなどを通して交流を重ね、「皆さんと一緒に」となっていくのは、多くの人々が退去するまで難しく、「Bの人」という呪縛が解けるのは2019年度になって草抜きを始めた頃だった。

4. 残ったのは誰か

当初の仮設入居期限であった2年目を境に、仮設住宅入居世帯数と退去世帯数が逆転した(図3)。また、四半期ごとの退去世帯数に着目すると、当初の仮設入居期限の2年に退去世帯数はピークを迎え、その後2018年10月から12月の3カ月間は10軒に留まる(図4)。2019年3月と2019年5月に熊本市南区内に災害公営住宅が完成し、退去世帯が再度増加した。2019年11月に完成した舞原第三団地は、ペットと入居が可能な災害公営住宅で、ペットの飼育は現在同居しているペット一代に限定されているものの、多くの入居者がこの団地へと引っ越した。

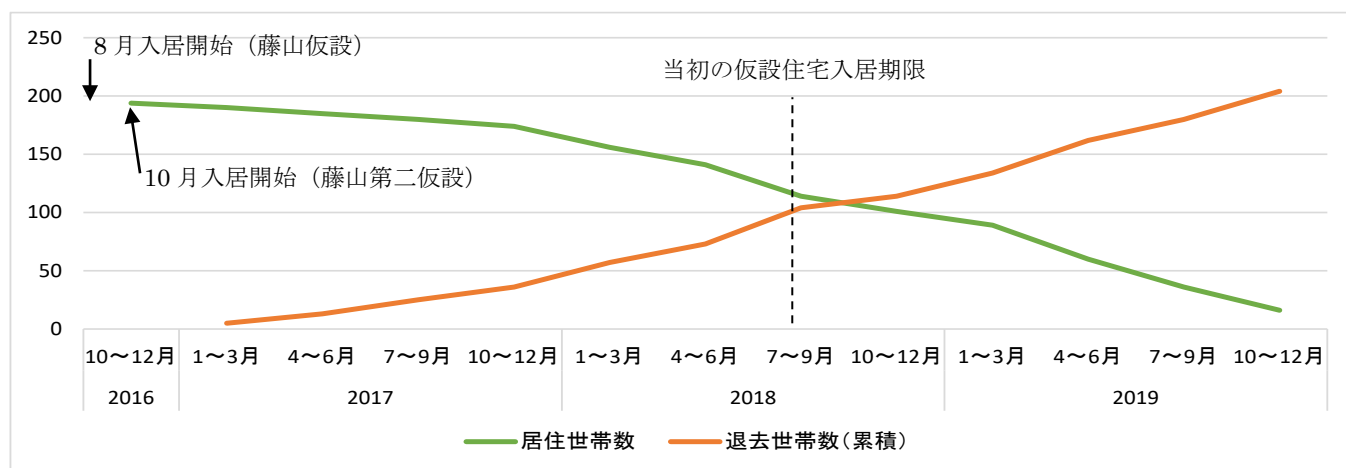


図3 藤山仮設住宅と藤山第二仮設住宅における入居世帯数・退去世帯数の変化

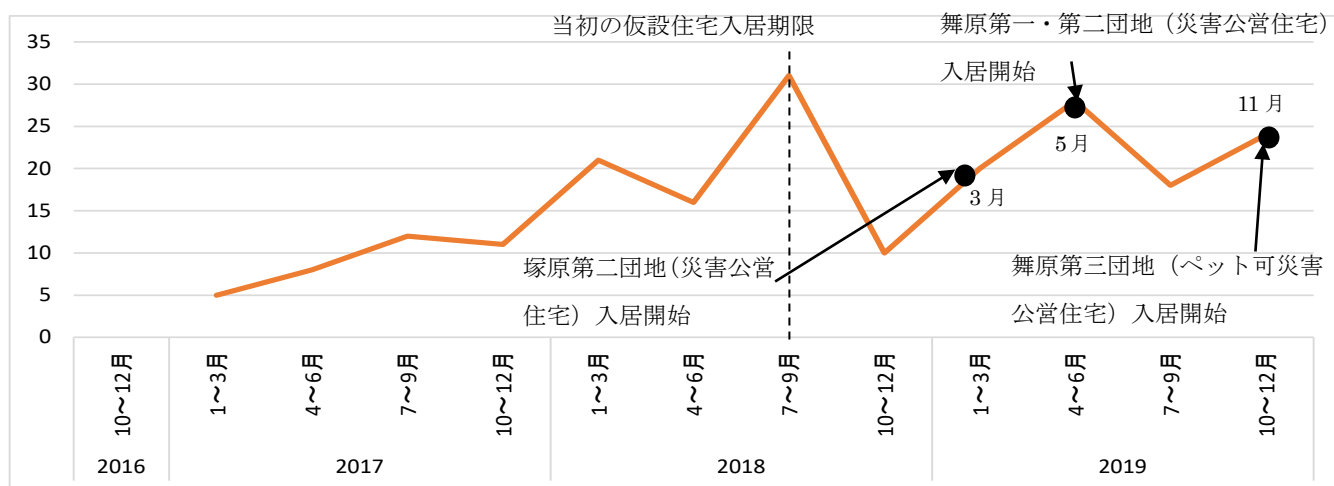


図4 退去世帯数の推移

2019年12月末現在までの退去状況について、図5に示した。藤山仮設住宅には、2020年1月以降も8世帯が残る予定で、2020年1月退去予定が2世帯、2月退去予定2世帯、3月退去予定が1世帯、5月退去予定が1世帯、そして、2020年6月退去予定が2世帯となっている。残った世帯の皆さんは、自宅再建を予定されている方々でほとんどの世帯が同じ地元の工務店と契約を結んでいる。そのため、お互いの自宅が再建されないと順番が回ってこない。

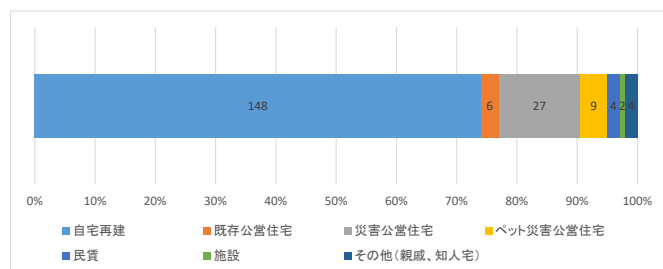


図5 仮設住宅退去後の状況

高齢者の独居世帯も2世帯あり(表2)、仮設団地に残る8軒のうち1軒は藤山第2仮設住宅にお住まいの方である。居住者は70歳の女性で、たった一人でB棟に住むよりも、他に残っている方々に近い場所に住みたいとの意向で、2019年12月にみんなの家(第1集会所)近くの空き部屋に移動された。当初、こうした独居高齢者の生活が心配されたが、世帯Fの70歳女性は、元の自宅周辺に持つアスパラガスの畑に毎日通って農作業に従事している。世帯Gの80歳女性も、毎日仮設団地内を散歩し、どちらの方も軽トラックを乗りこなして外出が多い。

表2 2020年以降の仮設居住者の状況

退去予定	世帯	家族構成
1月	A	43歳男性、48歳女性、9歳男性
	B	47歳男性
2月	C	65歳男性、27歳女性、1歳男性
	D	63歳男性、62歳女性
3月	E	74歳女性、51歳男性、46歳男性
5月	F	70歳女性
6月	G	80歳女性
	H	72歳男性、71歳女性、43歳男性

独居高齢者の心配もさることながら、世帯Aの「9歳男性」にも注目したい。この仮設団地に残る唯一の小学生になる。通学は両親の車で送り迎え、距離的な問題から放課後友達と遊ぶことも難しい。週末に、仮設で一緒に過ごした近くの友達が遊びに来てくれる。

5. おわりに

この2年半の活動を通して、仮設団地そのものの雰囲気はずいぶん変わった。当初はピリピリした雰囲気と「Aだ」「Bだ」という声だったものが、今や閑散とし鳥や犬の鳴き声と車が砂利道を走る音がするくらいになった。

入居の時には、コミュニティの維持だ形成だとしてこいくらいに言われていたのに、災害公営住宅での新しいコミュニティづくりに関心は移り、仮設に残った方々は「自宅再建を待つだけだから」と何となく退去していくのを待っているだけのように感じる。新しい住宅を手に入れ、それぞれが仮設住宅を退去できたことは嬉しく思う。その反面、187戸もの空き家に囲まれて生活する8世帯の方々をおもうと、こういう閉じ方しかないのだろうかとも思う。

謝辞

学生のボランティア活動および本稿執筆にあたり、藤山仮設住宅及び藤山第2仮設住宅にお住いの皆様、熊本市社会福祉協議会生活相談サポート支援センターの村上美津様、村上眞一様にご協力をお願いいたします。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 内閣府(2019),平成28年(2016年)熊本県熊本地方を震源とする地震に係る被害状況等について,
http://www.bousai.go.jp/updates/h280414jishin/pdf/h280414jishin_55.pdf(2019-12-11).
- 2) 熊本県(2019), 応急仮設住宅等の入居状況(6月30日現在)
https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=28465&sub_id=1&flid=198433(2019-12-11).
- 3) 熊本県(2016), 応急仮設住宅一覧,
https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=15918&sub_id=79&flid=89284(2019-12-11).